

沼田盆地の地形と土地利用

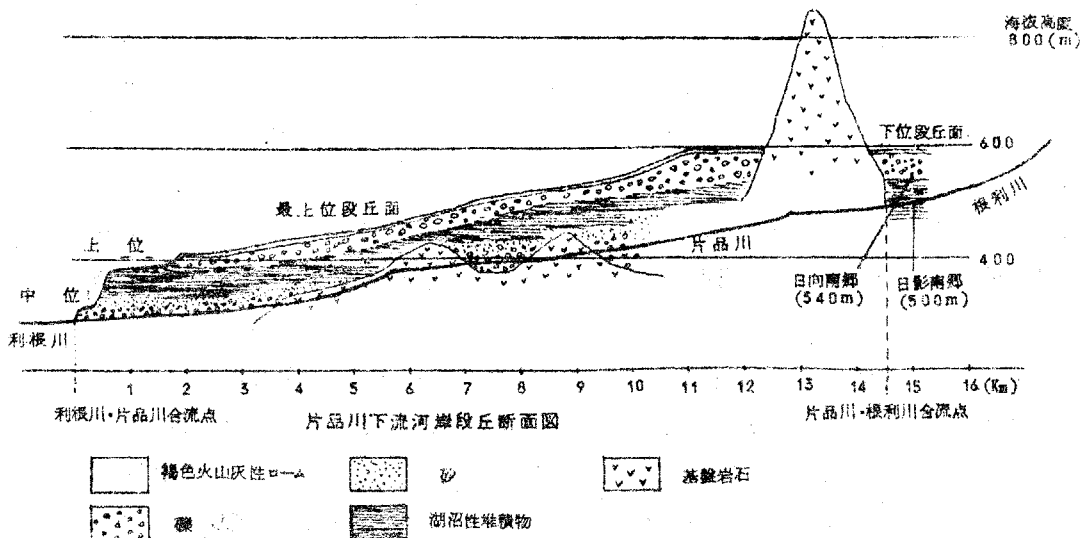
馬場 由美子

本論文の調査地域は、群馬県北部利根川上流に位置し、北方を谷川連峰・三国山脈に、南方を赤城嶽名・子持の山々に囲まれた、海拔300~600mの山間盆地である沼田盆地である。

本論文では、地形を主な研究対象とし、地形その他の自然地理的環境を base としての土地利用 — 特に農業を主体とする地域であるので農業土地利用 — について考察し、そこからこの地域の性格を導き出すことを目的とした。

論文の構成は、1章 地域概説、2章 地形、3章 土地利用の概説と変遷、4章 農業土地利用の多角性に関する考察、5章 要約 とし、第2章と第4及び5章に重点を置いた。

〔地形〕 沼田盆地には非常に顕著な河岸段丘が発達しており、この河岸段丘の微地形を調査した。海拔高度・河床からの比高・面の連続性・火山灰性ロームなどの層序及び有無などにより、段丘面を4つの面に分類した。



また、段丘崖に見られる湖沼性の粘土層について、それを堆積した古沼田湖の成因についても、考察した。この湖成層は盆地東方の海拔540m、500mの地点で観察されたことにより、湖成層上面の傾斜は、最も古い盆地床堆積物を載せている最高位段丘面上面の傾斜より小さいことがわ

かった。この事から、最高位段丘面は湖成層の原因ではなく、湖成層がかなり開析を受けて後に厚い礫層の堆積があり、その上に火山灰性ロームを載せているので、この湖成層は非常に古いものと考えられる。また、湖成層堆積当時の原面は、現在の海拔高度で540m以上と考えられる事、沼田町南方の赤城山山麓の露頭観察により、古沼田湖の成因を赤城火山岩砕流の棚下附近における利根川のせき止めとする説は矛盾し、他の成因を考えねばならない事が考えられた。

〔土地利用及び要約〕 土地利用については現在の沼田市、利根郡川場村、白沢村、昭和村、月夜野町の地域を対象とし、調査にあたっては、旧町村別、次に各旧町村から1～2つづつ、地形面に関連させて18集落を、更にそこから1戸づつ農家を選び、主に1965年農林センサス及び現地での聞き込みを主な資料として考察した。沼田盆地の農業は従来の養蚕と普通畑作物との組み合わせによる自給的農業から、最近養蚕と多種類の特徴的な商品作物（ホップ、こんにゃく、加工トマト、りんご、たばこ等）の栽培とを組み合わせた農業に変化し多角的な方向を示して来ている。このような多角性は、第1に自然条件（特に気候、地形）、第2に国道、上越線などによる交通立地の優位性、第3に地形の影響により水田が少ない事から、換金作物栽培を積極的に取入れ、農業を主体としていこうとする農家が多い事、その場合自然条件から何種類もの作物栽培が可能であり、農家経営の安全性を考える農家が多い事、また2～3種類に限った専業化への過程として試行錯誤している状態である事、為政者側も適地適作による主産地形成に熱心である事などの農業経営面での条件、以上の条件によりもたらされたと考えられる。

浅間火山東北麓の地理学的考察

—北軽井沢開拓地の酪農を中心として—

細 井 玲 子

浅間火山東北麓の地域性を把握するために北軽井沢開拓地における酪農を中心として考察を行った。現在、酪農専業で経営を成り立たせるためには、乳牛は1戸当り平均最低15頭必要であるが、本地域の1戸当り平均耕地が4町歩であるため7～8頭が限度である。ここは標高960～1180mという高冷地であり、東京へトラックで4時間という位置にあるため、高冷地野菜を適度に組み合わせた酪農経営を行っている。本地域は酪農専業地域ではないが、開拓酪農地域としては注目すべき所である。